

活躍しています。ピラポやラ・パス移住地では、日系人が市長や市会議員に当選しています。

南部の移住地の周辺は広大な農業地帯で、パラグアイの経済を支えています。入植当時の原始林の開拓は過酷なもので、いまの風景からは想像もできない厳しい苦難の時代があったそうです。この国の人全人口に占める日系人の割合は極めて少ないのですが(約0.1%)、農業分野での貢献度は非常に大きく、この国の農業を語るとき、日本人移住者の活躍を抜きには語れません。特に、野菜の普及による食生活の改善や大豆を国の重要な輸出作物として定着させた功績(世界第4位の輸出国)は非常に大きく、また、大豆の裏作物として栽培された小麦も生産量が増加しました。他にも、畜産、養蜂、果樹園などを営む農家もあります。この貢献度の高さや、勤勉で誠実であるという印象から、現地の人たちから非常に信頼されていて、パラグアイは南米で一番の親日国だといわれます。

日系移住地は、日本の田舎みたいなもので、行き交う人々みんな日本人。日本からこられた方たちも、「田舎に帰ってきたみたい」という感想が多いようです。日本食品も色々作っている方がたくさんおり、味噌・醤油はもちろんのこと、豆腐、納豆、梅干、福神漬など、こんにゃくからイカの塩辛まで簡単に手に入ります。日本語さえできればここで不自由なく生活することができます。

各移住地には様々な日系人の活動を統括する日本人会があり、婦人部、青年部、老人会等を通じて様々な行事(成人式、敬老会、盆踊り、バザー、運動会等)が行われています。移住地によっては、和太鼓を演奏するグループもあり、各地の盆踊りなどで腕前を披露しています。この他に、パラグアイの祭りやイベントなどにも、日本料理の屋台(焼き鳥や巻き寿司など)を出店して高い評判を得ています(焼き鳥はすぐに売り切れる)。

日系人社会で一番盛り上がりをみせるのはなんと言っても夏休み・冬休みに行われる各種スポーツ大会です。全パラグアイの移住地同士が競い合う大会でサッカー、バレーボール、ゲートボール、相撲、卓球等があり、最近はパークゴルフがブームになっています。また日本語学校では、発表会、弁論大会、バザー、運動会、日本語能力試験などが行われ、日系人の子供はこれらの活動を通して日本語・日本文化を学びます。「パラグアイの日本人は日本語がうまい」と言われる由縁がここにあるかもしれません。

80年代からは日本へ出稼ぎにいく日系人の数が増えています。初めの頃はいわゆる3Kと呼ばれる仕事にしきつけませんでしたが、最近ではそうでもないようです。しかし、これから日系人社会を支える有望な人材がパラグアイを離れることを懸念する人もいます。

これを読まれて、パラグアイやそこに住む人たちのことを、少しでも理解していただけたら幸いです。

#### 日系人の概況

移住地名	適用	面積(ha)	戸数	人数
ラ・コルメナ移住地	戦前の移住地(1936年入植開始)	3.500	79	310
チャベス移住地	パ国側移住地(1953年入植開始)	5.500	31	189
アマンバイ移住地	雇用農移住地(1956年入植開始)		128	465
ラ・パス移住地	事業団直営移住地(1955年開設)	15.952	146	726
ピラポ移住地	事業団直営移住地(1960年開設)	84.217	237	1,299
イグアス移住地	事業団直営移住地(1961年開設)	87.762	186	969
ピラレタ移住地	事業団直営移住地(1984年開設)	533	4	15
エステ市及び近郊			57	138
アスンシオン市及び近郊		532		2,126
エンカルナシオン市及び近郊		82		342
その他			20	116
合計		1,502		6,695

注1 ラ・コルメナ、チャベス、アマンバイについては、日本人所有面積

注2 日系団体報告書より



日本人会のイベントの一つ、「総会」での様子

#### ミニインタビュー



ひとときわ暑い夜、トレードマークの帽子をヒヨイとかぶり「このくらい(の暑さ)は向こうでは普通ですから」と飄々と語る早川さんに日系社会について2、3教えてもらった。

日系移住地では日本人向けの日常品の並ぶ店もあり、ひと通りの生活に不自由はない。子どもたちは午前中はスペイン語で教える公立校へ、午後は日本語学校へ行く。「日本語学校は日本の塾のような感じです」と早川さん。移住地の話を聞いていて漠然と日本の町内会のようなものをイメージした。「パラグアイの日本人はブラジルなどと比べると人数が少なく、日系社会もその分よくまとまっています」。

地元で日本人に対する信頼が高いのは、例えば、「日本人の経営する店の品物は良いとか言われます。日本人のお医者さんも評判が良いです」。

「パラグアイには海がないので、海産物はチリから輸入しています」。経済的には隣国ブラジルやアルゼンチンの影響が大きいです。パラナ川の対岸(川幅約1km)のポサンダス市へはIDカードを見せるだけで国際橋を渡って行くことができ、普通48時間滞在できる。近隣諸国との関係は密だが、日系人の場合、やはり目は日本に向いているという。

「入植して相当苦労したらしいです。あまり話してくれませんが…」という早川さんのお父さんは夕張市から15歳の時に両親と移住した。今も千歳市にはそのお父さんの妹さんがいる。お母さんはパラグアイ生まれの2世で、横浜にはその母方の祖母をはじめ何人かの親類がいる。「まだ皆に会つてはいないんですが」と、会うのを楽しみにしている。

ところで名前のファウスト(Fausto)さんは、「スペイン語で幸せという意味で、この言葉は国歌にもでてきます」。北海道の人たちにひとと言をというと、「今回、研修のチャンスを与えてもらってありがとうございます」「この研修が終わったら帰国しますが、日本の技術はとても高いですからまた勉強に来たいです」。24歳、パラグアイ、エンカルナシオン市出身。平成17年3月まで、(株)HBA(本社・札幌市)でコンピューター技術の研修を行う。

#### 「であい」前号(Vol.33)紙上 表記洩れのお詫び

前号の特集記事、「北ぐにでのであいー「ゆとろぎ」の民、ムスリムー」を読んでいただけましたか。中央大学総合政策学部の片倉もとご教授にご執筆いただきました。イスラム教徒の人々の一端を知って頂けたならば幸いです。記事中のバリ、ウィーン市内のムスリムの写真は片倉教授の撮影になるものでした。撮影者としてのお名前の表記洩れがありました。ここにお知らせしてお詫び致します。

(編集部)